特集

職人の手仕事から
生まれる一点もの

津軽塗

津軽塗は、津軽地方に伝承される漆器制作技術。その始まりは、17世紀後半に産業振興のため弘前に招いた若狭地方の塗師（ぬし）がもたらした技術が、独自に発展していったものと言われています。塗師たちの創意工夫の積み重ねによって洗練された技法として確立し、18世紀前半には多様な変り塗を用いた制作が行われるようになったと考えられています。

私たちが住む津軽地方で育まれ300年以上愛されてきた津軽塗に、いま一度親しんでみませんか。

■問い合わせ先
文化財課（☎82-1642）

津軽塗は、多様な変り塗の技術が同一地方にまとまって伝承されている点で、県内の他の工芸品とは異なります。こうした点が評価され、平成29年に国の重要無形文化財に指定されました。今回は、津軽塗の保持団体として認定されている津軽塗技術保存会の会員の中から、３人にお話を聞きました。

津軽塗技術保存会会長
今 照芳さん

津軽漆塗手板

若い人が安心して職人を目指せる環境を作りたい

津軽塗技術保存会は、津軽塗の品格と技術の保存・向上を図ることを目的に発足し、今年で20年になります。

主な活動のひとつに古津軽塗の再現事業があります。市立博物館所蔵の「津軽漆塗手板（※）」をもとに昔の津軽塗を再現し、これまでに盆付き五段重、御膳・御盆などを制作しました。

保存会として特に力を入れているのは後継者の育成。漆で生計を立てることは難しく、若い人が伝統工芸の道を目指しにくいことも事実。収入につなげるために、研修生には津軽塗以外にもさまざまな現場を経験してほしいです。例えば、弘前に多く存在する文化財の修復作業では漆の部分を修復する際に技術を活かせると思います。「大は小を兼ねる」と言いますが漆の世界では逆。建物の修復を専門にやってきた人は手の動きがおおざっぱになり、細かい刷毛(はけ)使いが苦手な人が多い。丁寧な工芸品作りができる人は、建物の修復でも力を発揮できます。文化財修復と津軽塗は互いに良い影響を与えると思っています。研修生がこのような経験を通して漆の技術を高め、文化財修復などの現場で収入を得て、安心して津軽塗職人を目指せる環境を作りたいです。

▶古津軽塗の再現事業で制作した「盆付き五段重」(平成21年制作)

木地師
山中 泰彦さん

▲木目を生かせるよう自ら塗りを試すことも

伝統の技術は、一度途絶えたら復活は難しい

祖父も父も林業に携わっていたので、木は小さい頃から身近な存在でした。県内の良質な木材の魅力を広めたいと思い、木工の道へ。仕事で訪れた弘前工業研究所でろくろの師匠と出会い、木を成型する挽物（ひきもの）を学んだことがきっかけで、木地（きじ）作りを始めました。

木との出会いは毎回楽しいし、面白い。同じ檜葉（ひば）でも木目や刃物との相性が違うので、出したい木目をイメージして、ろくろにかける向きなどを調整します。津軽塗は日常生活で使うためのものですから、持った時に手になじむか、口当たりや椀の厚みはどうかなど、使うときのことを想像して作業しています。「津軽塗はもったいなくて使えない」という声を聞きますが、津軽塗は使うことで味わいが増し、手になじむもの。ぜひ使ってください。津軽塗は塗師が注目されがちですが、塗師と同じように情熱をもった木地師がいることを知ってほしいです。

ここ数十年で、機械で大量生産できる安価な素材が流通し、木地職人の需要は減少。昔はたくさんいた木地職人も少なくなりました。伝統の技は、実際に見て指導を受けて受け継がれるものですから、一度途絶えてしまったら復活は困難です。私が30年以上かけて培った木地作りの技術を、惜しみなく研修生に受け継ぐことが私の使命だと感じています。

▲木地をろくろで挽く山中さん

想像通りのものができないからこそ面白い

小さい頃からものづくりが好きで、手に職をつけることに憧れていました。中学校を卒業して津軽塗職人に弟子入り。はじめは何もわからず、とにかく師匠の手の動きをまねして、早く一人前になりたいと必死でした。思い通りの作品ができずに苦しんだこともありましたが、人に褒められる嬉しさを力に今日まで続けてきました。

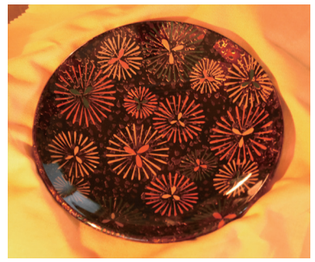
塗りは、完成を想像するところから始まります。想像通りの作品ができないこともありますが、手を動かすたびに新しい発見があるとそれもまた楽しい。だからこそ津軽塗は作品のひとつひとつが一点もので、全く同じものは作れません。

好きな塗りは唐塗。色やヘラの使い分けをすることで無限に生み出せるところが好きです。唐塗は津軽塗の代表格で昔から親しまれてきた柄ですが、最近は古さを感じさせない色合いにも挑戦しています。緑や赤が一般的ですが、青もなかなかいいですよ。

塗りの工程で特に力が入るのは最後のつや出し。津軽塗からつやをとったら魅力が半減するくらい大切な工程です。つやは、研ぎ出した柄や模様に立体感や輝きをつける効果があり、そこがうまくできると自信を持って作品を出すことができます。

私は、研修生に技術を伝える立場でもあります。研修生と関わって思うのは、「私は教える立場でもあり教わる立場でもある」ということ。研修生の存在は、これからも良い塗りを追い求めたいという思いを強くさせます。塗りの技術は手が覚えていますから、感覚の部分を言葉で説明することは難しい。どうすれば伝わるか試行錯誤の連続で、独立してもまだまだ勉強中。研修生には一人でも多く、津軽塗の世界で活躍してくれたらと願っています。

塗師
今 年人さん



▲最近制作した銘々皿は会心の出来

※**津軽漆塗手板（つがるうるしぬりていた）**…江戸後期から明治前期にかけて津軽地方で塗られた514枚からなる手板（模様の見本、カタログのようなもの）で、平成7年に津軽家から市に寄贈され、平成15年に青森県重宝に指定された。